開館30周年記念事業「絵画感想文コンクール」
一般の部　審査講評

作家・神田日勝記念美術館名誉館長　小檜山　博

無意識のなかへ

絵画にしろ文学にしろ、作者は作品を生み出すために持ち得る全精神を集中、知識や感性、想像力をはたらかせる。しかし、いかに努力しても意識として作品にあらわれるのは八割ほどで、あとの二割は作者自身が意識していない無意識が左右している、とぼくは考える。その無意識の世界に作品の核がひそんでいる、とぼくは考える。そしてその無意識が作り出す感動が、作品に接する者の心の底に沈む無意識を映し出すかがみになると、ぼくは思っている。

七編の候補作がそれぞれ神田日勝の無意識に触れようとしているのを感じて感銘を受けた。

最優秀の桐生莉緒さんの文。この馬は神田日勝で、この作品が神田日勝の人生というとらえ方は、おそらくこの絵を見る人の多くが感じるであろう感動を率直に表現して見事である。

優秀の竺原誠司さんの文は、この絵の作者の無意識を自分の心の眼で見、とらえようとしているのを感じる。

入選の竹津昇さんは、描いた動作や意図が読みとれないと言いつつ、日勝が無意識のうちに自画像を描いていたとのとらえ方がいい。

同じく入選の芦田晋作さんは、「拍手」の誌的なかたちが独特である。「余白は画家の死を描いていた」の表現が誌的でいい。

候補作のあと三作も、それぞれが日勝がこの作品に向かったときの無意識に触れようとする意図を感じ、作品が見る者の人生を写し出す鏡になりうるの感を深くした。